



令和3（2021）年度「不登校を考える学習会」（第2回）を行いました。

2021.10.9(土) 小郡市文化会館小ホール

演題：不登校支援の輪を広げよう

講師：不登校生保護者の会「ぼちぼちの会」会長 ^{きむら もとや} 木村 素也 さん



今回の学習会は、昨年度に続いて木村素也さんを講師に迎え、42名の参加で学習会を行いました。木村さんは、元中学校の校長先生で、現在も多くの不登校の生徒や保護者に関わり、各地で講演を行っておられます。

今回は、不登校生を取り巻く今の状況や子どもが前向きになれるために必要なことなどを中心に話していただきました。学習会の内容を以下に記します。

○ 自尊感情が高まるために必要な視点

成功するには努力が必要です。そして、努力するには自尊感情が必要です。自尊感情を高めるには、単に「褒める」ではなく、「できることに目を向ける（できないことに執着しない）」

ことです。学校に行かないことに執着しなければ、その子のいいところはたくさんあります。逆に、本人の決断を奪うことや、腫れ物に触るような対応は自尊感情を下げます。「今できること」と「今はできないこと」に分けて（分けるのは本人）行動できるよう周りの大人は見守り、それができなかったことで本人を否定しないことが大切です。

○ 多様な教育環境があれば子どもは学校に行きやすくなる

日本は、効率よく教育を受けるため、「みんなが同じように」ということを重視してきました。しかし、折り合いのつけ方が苦手な子もいるので、このシステムが時代の変化に合わなくなってきています。以前は「教室に入れないなんてわがままだ」という対応だったのが、保健室登校や別室登校の場所の確保など、昔とはずいぶん変わってきていますが、現在の法体系や人員環境では弾力的運用にも限界があり、学校以外の教育機関も諸外国に比べてとても少ないです。

高校では、授業開始時刻や単位の取り方など、義務教育に比べて多様なスタイル（環境）の学校があります。すべての人に合う環境はなく、自分らしく学べる環境があると、子どもは学校に行きやすくなります。

「通信制高校に進学する」という選択の中にも、「自分にとって頑張れる環境だから」と思って進学するのか、「仕方がないから」と進学するのでは、その後が大きく違ってきます。本人の自己選択を尊重し、自尊感情を持って進めるよう大人が見守ることが大切です。

○ 不登校の経験から

学習会の後半は、小学校と中学校のときに不登校を経験された大学生の方にも加わっていただき、参加者が書いた質問用紙にもとづいて、会を進めていきました。

【不登校になった原因や学校に通えるようになったきっかけは？】

小学校では、机を叩いて話し、「みんな仲良くしなければならない」という担任の先生の圧力が苦手だった。中学校では、部活動の先輩たちの圧力をきっかけに不登校に。適応指導教室で自分を見つめ、幅広い人との出会いや中学3年生の担任の先生が共感的に理解して下さったこともあり、高校から学校に通えるようになり、今年、高校の教師をめざして教育実習に取り組んでいる。

【うれしかった大人の言動、つらかった大人の言動は？】

不登校だったときには、自分を尊重してくれる親の言葉や、夜にプリントをもらう目的で学校に行けた時、担任の先生の理解がうれしかった。逆に、「勉強、大丈夫？」など、わかっている事を突きつけられたり、人と比較されたりすることがつらかった。

また、学校に行かないことを忘れたい、孤独感を紛らわせたいという理由でゲームをしていたことや、学校の下校時刻の16時頃になるとほっとしていた経験も話されました。



参加者アンケートより

- 今、不登校になっている子どもに対してどのように対応すべきか等をしっかり教えていただき、本当に聴きたい内容でした。子どもの自尊心を尊重することの大切さを学びました。どうしても親や大人目線で考えてしまい、反省する点が多かったです。本当に参加して良かったです。【保護者】
- とても勉強になりました。特に、大学生の方のお話は、子どもと向き合う上でとても参考になりました。ありがとうございました。【保護者】
- 学校に行けなくても、その子が生きていくために必要なことや学ぶ権利をどう保障していくかを社会は考えていかないといけないと思いました。【地域の方】
- 不登校の子どもたちが学校に行けない原因は本人の原因だと考えがちであるが、環境要因もあることも考慮に入れ、本人を尊重しつつ、どうしたら学校に行くことができるかを一緒に考えることがとても大切だということが心に残りました。【地域の方】
- 教員はどうしても子どもを登校させたいという思いや声かけになります。「長い人生の中で見ると…」と思いますが、子どもの思いを知ることの必要性を感じています。「自尊感情の高まりからくる自信をどう高めるか」が現場でもすごく悩みのひとつです。子ども一人ひとりの背景や思いに寄り添って取り組んでいきたいと思います。また、大学生の方の生の声を聴くことができ、すごく勉強になりました。現場の多くの先生に聴いてほしいと思いました。【教職員】

○ 学習会を終えて

ここ数年、不登校になる小中学生は増加傾向であることが文部科学省の調査結果から出ています。だからこそ、私たちの価値観の転換が必要だと感じました。

家庭・地域・学校などで子どもたちと向き合っている方は、「学校に行かないことが人生の終わりではない」価値観を持ってほしいというお話がありました。本人の決断を尊重すること、できることに目を向けること、途中までやって引き返したとしても決してかっこ悪いことではないこと — という価値観を共有したいということも話されました。

学習会終了後の交流会より

- ・(保護者より)「頑張れることを1つでも見つけられるといいね」という声かけは大切
- ・(大学生より)「明日、学校に行けるかどうかは、明日にならないとわからなかった。」
 - (教職員より)「担任としての『明日、学校に行ける?』という声かけは、子どもにとってきつかったかなと思う。」
 - (成人した子どもの保護者 — 現在は不登校生の支援を行っている方より)「クラスの子どもから不登校生に宛てた『学校に来てほしい』という手紙(書いた本人は善意で書いている)が問題を深くすることもあるので注意が必要。」
- ・(保護者より)「不登校の我が子に『これを言うてはいけない』を意識しすぎると、子どもに何も言えなくなってしまう。」
 - (木村さんより)「あまり考えすぎなくていい。本当に思っていないのに、『学校に行かなくていいよ』と言う必要はない。『私(親)はこう思うけど、あなたは どう思う? (どう受け止める?)』という話し方でいいのではないか。」

新型コロナウイルス感染症の影響で、人と人との接触が制限される現在ではありますが、会が終わった後のみなさんの表情を見ると、やはり顔を合わせて思いを出し合う、聴き合うことの尊さを感じた時間でした。